

『閑吟集』の編者像

井 出 幸 男

一 はじめに

『閑吟集』の編者をどのような人物と考えるか、それは小歌の集成としての『閑吟集』の性格規定にも重要に関わってくる問題である。しかし、これまで「宗長説」及びその否定説、「元公家説」「元五山僧説」等の諸説が提出されているが、基本的に資料の欠如という障害もあり、いずれも決着を見ないまま今日に至っている。

本稿は、そうした編者をめぐる推定説及び論争を取り上げ、再検討を試みると共に、新たに編者像想定への手がかりを提出したいと考えるものである。結論として明確な個人名を指摘し得るものではないが、従来の説及び論争における様々な問題点、欠陥というものを指摘することにより、しばらく途切れている編者論を一步でも前に進めることができたと考えている。

二 序文による編者の考察

従来の推定説においてまず問題となるのは序文である。真名序

と仮名序とがあるが、現在のところ編者を推定し得る最も重要な手がかりであるため、様々に引用され、根拠として用いられている。しかし、その際第一に確かめておかねばならないことは、それが編者自身の手になる「自序」であるかどうかということである。「爰有一狂客」(真名序)とか、「ここにひとりの桑門あり、ふじの遠望をたよりに庵をむすびて云々」(仮名序)というような、客観的に編者を形容したと見られることは問題ないわけであるが、真名序の中から「中殿嘉会、朗吟罷浅々斟、大樹遊宴、早歌了低々唱」という一節を抜き出し、編者自身に関する記事と見て、「編者は、かつて相当の年輩に至るまで上流貴紳として朝廷と將軍家とに出入し、後出家して富士の遠望せられる所に隠棲した人であらう」(吾郷寅之進氏説)⁽¹⁾とするなどは、真名序が仮名序と共に、編者自身の自作であるとしなければ成立しえない考である。吾郷氏は又、真名序全体の行文を検討し、「編者には仏教中禅宗的の教養は看取しがたく、儒教的教養の方がはるかに強く感ぜられるのであるから、専門の仏教者として世に出た人とは考え難い」と、編者の思想的立場の推測にも援用しておられ

るが、これも又、真名序が編者自身のものであるということ前提となればならない。この他、日原はるみ氏も吾郷説をうけて、真名序・仮名序を中心とした検討から「編者は公家であつた人物であり、嘗て貴族化した足利將軍家を中心に五山の禪僧らとも交流のあつた文化圏に属していた」との推論を展開している。

しかしながら、こうした序文が、共に編者自身の手になるということは、それほど自明なことであらうか。

まず、真名・仮名の両序の間の内容の隔りが問題である。従来両方の序を備えることは『古今集』以来の勅撰集の伝統によるものと説明されている。しかし詳細に序文を見るに『閑吟集』の場合は、真名・仮名の両序を有する勅撰集（古今・新古今・続古今・風雅・新続古今）や准勅撰集（菟玖波集）などの場合とはいささか趣を異にしている。すなわち、勅撰（准勅撰）集においては、概ね両方の序が対をなし、対等の機能を果たしているのに対し、『閑吟集』においては、両序は内容において相違し、分量においても真名序が仮名序を著しく圧倒し、対等の関係にはない。

たとえば、成立の時期については、真名序は「干陀、永正戊寅（八月）」と明記しているのに対し、仮名序では「時しも秋の螢にかたひて、月をしるべにしるす事しかり」と、わずかに「秋」という時期が示されているだけである。要するに真名序が無ければ正式な成立年・月はわからないわけで、仮名序は完全に従の立場に甘んじているといえる。勅撰（准勅撰）集においては、すべて両序とも成立の時期は明記しており、このような例はない。

さらに重要なことは全体の叙述の態度の相違である。真名序は

「夫、謳歌之為道、自乾坤定剛柔成以降、聖君之至徳、賢王之要道也」と勅撰集ばりの文句で始まり、漢籍を博引し、中国における謳歌の実態、我が国の歌謡の変遷を述べ、ひたすら「小歌」や『閑吟集』編纂の政教的意義を強調している。すなわち『孝経』に見える「至徳要道」ということばは三度もくりかえされる他、その内容は「五千餘軸、迦人之小歌也、五典三墳、先王之小歌也、移風易俗、経夫婦、成孝敬、厚人倫、吁、小歌之義、大矣哉」「仲数奇好事、論三綱五常、聖人賢士至徳要道也、豈小補哉」と、非常に高い調子で貫かれている。これに対し仮名序では、「小歌」は「歌の一ふしをなぐさみ草にて」と、あくまで個人的なものとしてとらえられ、又『閑吟集』編纂の目的も「こゑもろともにせし老若、なかば古人となりぬる懷舊のもよほしに（中略）忘れがたみにもと、思ひ出るにしたがひて、閑居の座右にしるしを」と、自分自身の懐古の欲求に発したものととして率直に述べられている。こうした個人的な編纂の動機については、真名序には全く見えない。

このように見てくると、真名・仮名の両序を備えているとは言っても『閑吟集』の場合は体裁上のことにすぎず、勅撰集になつた公式的な外形を備えているものは真名序だけであることがわかる。仮名序の内容は序文としては私的な要素が多く、真名序の気負つた姿勢とは対照的なものであり、勅撰集などの公式の序文とは比較にならないものである。しかし、ここで注意しておかなければならないことは、そうした序文としての外見・体裁にかかわらず、仮名序の方がより『閑吟集』小歌の本質を代表している

ということである。真名序の儒教的な政教主義は正式な序文としての役割は十分に果たしてはいるが、民謡や芸能の歌謡、遊宴の歌といった小歌の実態・本質にはいかにそぐわないものがある。それではこうした真名序と仮名序の差異は一体何によるものだろうか。もちろん同一の編者による使い分けという考え方も一応はできる。しかし、私は次に述べる観点をさらに考え合わせることに、仮名序は編者自身のものであるが、真名序は編者以外の別人の手になるものと考ええる。

問題となるのは真名序の「于眩、永正戊寅鸞八月、青灯夜雨之憲、述而作、以貽同志云尔」という末尾の記述である。従来の解釈では「述而作」の内容が必ずしも明確ではないが、『閑吟集』の全体を指し、それを同好の士（同志）に伝えること（貽）という意味にとられている。しかし「述而作」は『閑吟集』の全体ではなく、それまで筆者が述べて来た真名序自体を指すことが文脈上十分に考えられる。また「貽」の字義であるが、『説文新附』（『大漢和辞典』所引）に「貽、贈遺也」とあり、『大字典』では「ヤリワタシ・ノコシオク意」、「新字源」では「①おく（贈）。人に物を贈る。②のこす（遺）。あとにのこす」と説明しているように、「のこす」の意と共に、「人に物をおくる（贈）」という意が重要な内容を占めている。この「貽」における「贈」の義に着目し、さらにその対象である「同志」の内容を検討してみると、「同志」という語も一般的な同好の士を指すものではなく、もっと直接的にこの真名序の筆者が序文を贈る「同志」、すなわち直前に「爰有一狂客、編三百余首謳歌、名目閑吟集」と記され

ている『閑吟集』の編者を指すことが考えられる。すなわち以上のことを合わせると、この最後の一文は「時に永正十五年秋八月、青灯夜雨の下、この真名序を述べ作り、小歌同好の士である編者に贈り、のこしておくものである」と解釈することができ、編者とは別の真名序筆者の存在を示す重要な根拠となる。

なお松田修氏は、仮名序の末尾「このおもむきをいさゝか雙紙のはしにといふ命にまかせ時しも秋の螢にかたらひて月をしるべにしるす事しかり」という叙述を主な論拠に、編者の擬態による「仮構の序者」という考え方を提示しておられるが、これまで述べて来た真名序・仮名序の内容の相違、叙述影態から判断すると、擬態による仮構とは仮名序だけのことであり、真名序においては、実際に編者に序文を贈ったしかるべき人物の存在を想定する方が、より妥当と思われる。

もし以上述べた私の見解が認められるとするならば、当然編者像は仮名序を中心として描くべきものであり、真名序はあくまでもその補助として扱うべきものとなる。特に、真名序を資料として使用する際は、その記事が客観的に編者を形容したものであるかを否かを見きわめることが大切である。両序を一樣に編者自身の作とし、そこから編者像を引き出してきた従来の推定説は、今一度再検討されなければならないまい。そうした意味で、真名序を重要な根拠とし、その儒教的学問の教養や「中殿嘉会」「大樹遊宴」等の記事から打ち出されてくる「編者元公家説」は、まず否定されるべきものであろう。

三 元五山僧説の再検討

『閑吟集』には漢詩句に素材のある歌謡が多く見られ、中でも本邦禅林の漢詩文に類似句の見出し得ることが注目されている。たとえば、

○清見寺へくれてかへれば、寒潮月をふひて袈裟にそゝぐ〔103〕
 という「狭義の小歌」の下句は、江西竜派（文安三年（一四四六）没）の『統翠詩集』の中の「送人之伊州」と題する詩の結句「寒潮吹月洒袈裟」を読み下しにした形である。また、

○清容不落鄆鄆枕 残夢疎声半夜鐘〔174〕

という「吟詩句」は、建長寺竜源庵所蔵詩集「光嚴老人詩」の中にある「寄人」と題する詩の転句と結句「清容不落鄆鄆夢」残雨疎燈半夜鐘に非常によく似ている。特に「夢」と「雨」の字はミセケチで「枕」「夢」となっており、こちらの本文を採れば『閑吟集』の詩句とは結句の疎燈の違いただけとなる。

これらは吾郷氏により指摘されたことであるが、氏はこの他
 9・10・17・38・23・24・50・51・102・104・112・172・173・185・209
 ・210番等の「吟詩句」及び「狭義の小歌」について禅林文学との関係を認められ「閑吟集の編者が禅林に属する者である」ということはほとんど疑いえない」とされた。又、小笠原恭子氏はさらに論を進め「閑吟集にみえるこういった漢詩文の知識は、かなり程度が高く、よく素人の及ぶところではない」「五山趣味の歌には後世の継承歌謡がほとんどない。その点からこうした歌が実際に歌われていたのか、編者個人の趣味による創作歌謡なのか疑問の

残るところである。その多くはおそらく編者の創作であつたように思われる」と、一連の漢詩句を織り込んだ小歌から、元五山僧を編者に擬している。

しかし、漢詩句に出自のある小歌が、そうしたものに親しみのある知識人の間から生まれたと見るのはよいが、だからといってすべてが五山僧の手になるものと考えたり、即座に『閑吟集』の編者は元五山僧と見るのは短絡に過ぎると思われる。管見によれば、「五山趣味」と呼ばれる小歌のいくつかは、必ずしも出典が五山詩文に限定されるものではない。

たとえば、吾郷氏が「本邦禅林即ち五山僧等の中の風流人によつて作り出された」と推定された127番の小歌、

○舟ゆけば岸うつる、涙川の瀬枕、雲はやければ月はこぶ、うはの空の心や、うはの空かやなにともな

は、出典は確かに禅宗で重んじられた『円覚経』の「雲駛月運、舟行岸移」にあり、五山文学の中にも天陰竜沢（明応九年（一五〇〇）没）の『天陰語録』に「生是非生雲駛月運、滅元非滅舟行岸移」とあるなど、用例は多い。しかし『円覚経』のこの経文は禅林の独占物では決してない。三条西実隆の『再昌草』大永八年四月四日の条には、

四日 夢庵周忌張行円覚經文也

とあり、

私定款
 定駛月運

すみかたき心の月をいかゝせん とすればかゝる雲のまよひに

と、他の経文と共にこの「雲駛月運」が和歌の題として用いられている。(定)の字は「雲」の誤りであろう)これによれば『円覚経』は当時の人々、少なくとも知識人の間では極めて一般的に經典になっていたことがわかる。また吾郷氏も指摘された謡曲「稲舟」(室町末期写本に出)の例によれば、「舟行岸移」という文句も「舟行けば岸も移り来て里にはやく着きにけり／＼」と非常に俗化された言い方に変えられて用いられているのである。

同様のことは185番の小歌、

○千里も遠からず、あはねば咫尺も千里よなふ

についても言える。「咫尺も千里」は『閑吟集研究大成』も指摘するように、李白の「報讎千里如咫尺」(李太白詩集五、少年行)、「高唐咫尺如千里」(同二十三、觀元丹丘坐巫山屏風)や、蘇東坡の「咫尺不相見、実与千里同」(穎州初别子由)などに原拠がある。吾郷氏は、さらに「因循咫尺成千里」(大休和尚偈頌雜題)などの例を多く本邦五山詩文の中から上げ、「特に仏教的ないしは禅宗的な思想の故にではなくて、五山禅林における中国文学の教養の一つの現われとしての詩句が、流布するうちに柔軟な恋愛歌謡と化せられたものであらう」と、五山詩文の流布に最も直接的な影響を認めておられる。しかし、これとても五山詩文の間で「咫尺如千里」の句が流行したのは確かであるが、それが185番の小歌を生み出す直接の力になったと簡単に結びつけて考えることはできない。現に、前にも上げた『再昌草』の永正十三年二月七日の条には、

七日 うつらを竹の枝につけて、若槻七郎といふものをく

り侍しを、今朝各會合の事ありとききて、大藏卿のもとに心さすとして

吾家雖咫尺 多情千里隔

君看百結衣 不接諸公席

とあり、「咫尺千里」の詩句が、公家の間で日常的なやりとりで利用されているのが知れる。内容は『閑吟集』のような恋愛歌ではないが、その用法は全く同様のものと見てよいであらう。また大永七年九月廿七日の条にも、実隆が一華和尚(建仁寺二八四代、繼天、天文十八年没)に呈し「伏して慈訂を乞う」た詩に

勤政有余能好文 閑開雅席接諸君

可憐病鶴翅翎知 咫尺蓬来千里雲

というのがある。この他「千里」という語と対にはなっていないが、「咫尺」という語の用例なら『再昌草』の中に数多く見出すことができる。要するに漢詩になじみのある貴族には、ごく普通のことばと見てよいであらう。

さらに、こうした知識人たちの用例ばかりではない。謡曲「輪藏」(観世弥次郎長俊―長享二年(一四八八)―天文十年(一五五〇)の作)には、

おろかの御僧の仰せやな、知ねば咫尺も千里を隔つといへ

り、

とあり、一種の俗諺として使用されている。俗諺としての「咫尺千里」の用例は『天草版金句集』(一五九二刊)や『日葡辞書』(一六〇三―四成)にも見られるが、当時こうした言い方が広く流布していたことが考えられる。

結局こうしてみると、小歌の成立及び流行の功は、前掲の李白・蘇東波の詩句もあることであり、五山詩文のみに帰せられるものではないと言はなければならないであろう。

○残灯屬下落梧之雨、是君を思ふにあらずとも髪まだらなるべし

[112]

右の小歌についても事情は同様である。吾郷氏は禅林文学の中から「何時坐聽落梧雨 隔掩夜燈秋意深」(真愚稿)「一葉梧桐憂思始 雁烟蛩雨鬢間霜」(三益艶詞)「日夜思君兩鬢斑」(混稽詩文)等の例を多数指摘し、又浅野建二氏は、「これという出典を明示することは困難であるが」としながらも「関係漢詩によって明らかのように、やはり当代禅林の僧徒の遊戯になる作であろう」と推定している。

確かにこの小歌においても五山詩文に類似句が多い。しかし浅野氏のように「禅林の僧徒」の作と考えるには、今すこしの証明が必要である。すなわち『再昌草』永正三年八月十五日の条には「内裏よりめされし」として、

中秋夜雨有感

中秋歳々月期晴 只恨狂雲礙雨生

今夜苦吟鬢応白 梧桐滴尽葉間声

という詩がある。その題や転句・結句の「鬢応白」「梧桐滴尽葉間声」などは、明らかに『閑吟集』小歌の詩情とも通いあうものである。またこのほか「落梧」あるいは「梧桐雨」「鬢霜」「鬢雪」という用例も多く、小歌の出所を禅林と限るわけにはとてもいかないことになる。

さらに、一般的に当時の禅林の在り方を眺めてみても、かつての世間と隔絶した高踏的な立場ではなく、一般社会と深い関わりを持った禅林に変わってきているということも指摘できる。禅林文学も当然孤立した状態ではなくなっているのである。安良岡康作氏によれば、禅林漢詩文は、室町中期以降、室町幕府の運命と共に衰退期に入り、その結果俗人の作る文学の諸形態と様々な交渉を深めている。そして禅林文学の隆盛期(南北朝期、室町初期)に叢林の一部で試みられていた漢詩の聯句が、連歌と結びついて和漢聯句となり、盛んに行なわれるようになったのもこうした風潮の中であつたとしている。禅林文学は、予想以上に深く当時の当時の社会の間に入り込んでいたと見るべきであろう。

このように見えてくると、五山詩文に類似句があるからといって、すべてその小歌が直接五山僧の手になると速断することはできない。各首ごとにさらに確実な挙証が必要になる。また、まして『閑吟集』の編者自身が元五山僧であつたとは、この段階では決して言えないことになる。

もちろん、数は限られるであろうが、五山僧の手になる小歌があつたのも事実であろう。(前記103・174番歌はその可能性が強い)又、そうした小歌の享受の場が、まず禅林にあつたということも考えられる。しかしそれらは決して閉ざされた特殊なものではなく、一般社会にも流出し、歓迎されたものと考えるべきであろう。特に周知の如く、応仁の乱以後は文化の上下・都と地方といった交流現象は著しいものがある。漢詩文に典拠のある小歌もそうした中で流行したものと考える。

なお、小笠原氏（前出）は「五山趣味の歌には後世の継筆歌謡がほとんどないことに疑問を持たれ、実際にはあまり歌われることのなかった編者自身の創作歌謡ではないかとも考えておられるが、これについても、これまで述べてきたことから当然否定してよいであろう。小歌にとられている漢詩句は概して特殊なものではなく、さらに『閑吟集』は、仮名序に「こゑもろともにせし老若、なかば古人となりぬる懷舊のもよほしに（中略）あるは僧侶佳句を吟ずる廊下のこと（中略）忘れがたみにもと思ひ出るにしがひて、閑居の座右にしるしをく」とあるように、あくまでも実際に歌われた歌の集成ということを前提として編纂されているからである。継承歌謡のないことも、歌われなかったからではなく、禪林の衰退現象や流行歌謡としての好みの変化によるものと見たらよいのではないだろうか。

四 宗長説をめぐる諸問題

これまで編者として上げられている唯一の個人名は連歌師の宗長である。宗長説は主に仮名序の記述から抽出されている。すなわち、宗長は▽永正元年、宇津山山麓に柴屋軒を結んだ人物として『閑吟集』成立の永正十五年まで、仮名序にいう「ふじの遠望をたよりに庵をむすびて、十余歳の雪を窓につむ」老人（宗長はこの年七一歳）にふさわしい▽僧形の連歌師として「ひとりの桑門」「とひえんきやうの花のもと月のまへの宴席にたちまじはり」という記述に適合する一等等である。この他『閑吟集』の連歌的編纂方法、『宗長手記』や『宇津山記』などに見られる宗長の歌

謡・芸能に関する記述、特に尺八の愛好（仮名序には「尺八をもとして云々」とある）なども指摘され、その論拠となっている。志田義秀・延義（『国語と国文学』昭六・一〇）西村紫明（『謡曲界』大十五・六）等の諸氏によつてとなえられて以来、一時力のあつた説であるが、浅野建二、吾郷寅之進の両氏によつてその否定説が出されてから、一応立ち消えといった状態になっている。

ここで私の問題としたのは、その「宗長否定説」の再検討ということである。前述の宗長説は、あくまで「状況証拠」による推定説であり、確実な新資料の出現がないかぎり断定はできないものであるが、その否定説についても根本的な欠陥が見られる。私としては別段宗長説をとるものではないが、可能性の問題として、宗長説もいまだ成り立ち得ることを記しておきたい。

浅野・吾郷両氏の否定説のうち、共に最も有力とされるのは、真名序に見られる『閑吟集』の編纂時、永正十五年秋八月に、宗長は京都に滞在しており、駿河の柴屋軒にはいなかったという事実である。すなわち宗長はこの年八月十日より三日間、東山安養寺で能勢頼豊三回忌追悼連歌「安養寺千句」を主催している。さらに『再昌草』六月廿五日の条の記事、

宗長法師、東山丸山の道場にて、越中国遊佐新右衛門まねきよせて、連歌すとして発句こひ侍しかは、

によれば、既に六月下旬に上洛している形跡がある。浅野、吾郷両氏は、これらの事実を大島俊子氏の「宗長年譜」（『女子大国文』昭三七・二）等から援用され、『閑吟集』の編纂とは地理的に矛盾するものとしている。吾郷氏は、さらに、六月下旬から八月上旬ま

での四十余日間、宗長の動靜が不明であるため、「その間に駿河に帰り、閑吟集の編纂を終えて八月初旬にふたたび上洛する」ということも旅行日程としては十分可能ではある」と、当時の紀行文から宇津山―京都間の所要日数までも計算し、想像をめぐらせている。

しかし私の見る限り、こうした地理的根拠に立つ否定説は全く無意味と思われる。なぜならば、真名序に見られる日付は序文の成立時すなわち『閑吟集』完成の最終時点を示すものであり、一応本文の完成時とは別に考えるべきものであるからである。極端に言えば、本文が数カ月前にできあがり、序文だけを八月に書き加えたということも考えられる。また、両序には実際に序文を書きしめた場所は限定も明記もしていないので、序文成立時に編者がどこにいたと一向にかまわないのである。さらに、第二項で述べたように真名序はしかるべき人物により編者に贈られたものと見るのが私の考えである。そうした考えに立つ時は、編者もし宗長であるとすれば、京都にすることはかえって好都合ということにもなる。

吾郷氏は六月下旬から八月月上旬までの四十余日間、宗長の動靜が不明であると心配しておられるが、確かに宗長は上洛以後ずっと京都に滞在していたようである。すなわち岩下紀之氏の示教によれば、『宣胤卿記』⁽¹⁾「永正十五年七月五日の条には、
近江守 近日自駿河上
宗長来、玄清相伴

という記事があり、『同紙背文書』には、

明日宗長可祇候之由定候處、夜前より歛衆仕候、可然情候可^様

申上由、只今申越候、其狀則懸御目候、此由御心得候て、可預御披露候、恐々謹言

八月四日

という書簡が見える。右の二つの資料によれば、宗長は上洛後約一カ月の間、中御門宣胤家に入出し、密接な関係を保っていたことがうかがえるわけで、この間に宗長が京都―駿河の間を往復したと見るのは、よほどの理由がないかぎり成り立たない。

私は必ずしも宗長説を主張するものではないが、以上のことから、もし編者を宗長とするならば、彼は六月下旬の上洛以前に『閑吟集』の本文のおおよそを調え終っており、それを持って上洛したことになる。あるいは正式な序文（真名序）をしかるべき人物に書いてもらうという目的も含めて、『閑吟集』の最終的な編纂・完成には、京都にいた方が何かと都合がよいという事情もあったかもしれない。右のように推測することも可能性としては依然として残されているのである。

このほか、宗長否定説としては、吾郷氏は『閑吟集』仮名序と宗長の諸手記の間の文体上の相違を上げている。しかしこれも私の見るかぎり妥当な説とは思われない。すなわち、吾郷氏は『東路のつと』『宇津山記』『宗長手記』『連歌比況集』（一説、兼載）の四書を上げ、宗長の文体の特色を、

①一つのセンテンスの長さが短い。

②助詞や動詞を省略した名詞で文を終止し、簡潔の趣きを見せ
ているが、文章全体としてはさほどテンポの速いものという
感じを与えない。

③語彙としては「思ひつつなん」「秋をだにとて」「山里にぞありし」などの助詞特に係結びの助詞が多い。又、時の助動詞や特に「侍り」の語の使用が多く、そこに平安朝風の優雅な趣きをもつものとなっている。

④文の終りに「き」「ぬ」「たり」「り」などの助動詞を用い、時制を正確に表現している。

などと考えられた。(要約は私意による。以下も同)そしてこれに対し『閑吟集』仮名序の文章は、

①長大なセンテンスがある。

②名詞のみで文を中止しあるいは終止することはない。全体としての文の運びのテンポは極めて速やかである。

③平安朝的な特殊用語が全く見えず、王朝風を脱却した独特の文章である。

④一つの文の末尾は動詞の終止形であり、この形で一貫している。

とし、前記の宗長の文体の特色とは相反するものであり、同一人の文章とは考えられないとした。しかし、宗長の文体の特色は果たして吾郷氏の考えられた「特色」の中に収まり切るものであろうか。私にはそうは思われない。あくまでも吾郷氏の上げられたものは宗長の文章の一部分的特徴であり、全体を代表しうるものではないのではないだろうか。もしそうであるとしたなら、吾郷氏の上げられた特色をもって、一律に宗長・非宗長を論ずることは極めて危険なことになる。

ここで一つの例を上げて考えてみよう。次に掲げるのは、宗長

の手になる連歌作法書『雨夜記』の自跋である。⁽¹⁸⁾

此一巻は宗祇老人に年比相尋し事を、昼は世の中のいとまなく人めもしけゝれば、雨夜のよひ／＼灯の本にて書つけ祇公へ捧ければ、祇公くり返し御らんし、はしはしもれたる事とも書加はへ給ひ、此道の趣向老人かむねに同じ、此外なしとて御ちかひ有、連歌の奥義是に過へからず。年は永正十六つちのとう、さ月かみの十日にしるしおほりぬ

宗長判

この『雨夜記』の成立時・永正十六年は、『閑吟集』成立の翌年にあたるので、時期的にも近く、又跋文という文章の性格も『閑吟集』の序文と比較するには適当なものであろう。

吾郷氏の上げられた論点と比較してみると、まず①センテンスの長さについては、吾郷氏の主張されるのとは全く逆で、「此一巻は」から「御ちかひ有」まで続く長いセンテンスが特徴的である。②の名詞で文を終止するといったこともなく、比較的文章のテンポもある。③「なん、だに、ぞ」といった強意の助詞も係結びの特徴もない。又「侍り」の使用は一つもない。全体的には師である宗祇について述べているので、ていねいなことは使いであり、「平安朝風の優雅な趣き」という点は当てはまらないこともないが、これは叙述の対象によって変わり得るもので、この場合強いて特徴というべきものでもないであらう。④の時制の問題については、これも全体の行文の状態・調子に従うべきものであり、特に判断の基準になるとは思われない。もし吾郷氏の言われるように宗長が時制に正確というのであれば、「祇公・御ちかひ有」

は、宗祇は既に文龜二年（一五〇二）に没しているので、厳密には終止形ではなく、下に過去の助動詞等を用いるべき所であるとも指摘できるが、特に反証として上げるまでもないであろう。

以上の結果、吾郷氏の論点は『雨夜記』の宗長自跋に見る限り当てはまらない点が多く、宗長の文体の特色を要約し得ているとは言いがたいのである。むしろ逆に『閑吟集』の仮名序の特徴と比べてみる時、『雨夜記』自跋は前述のようにセンチメンスの長い点など、共通点を指摘できるといった面もある。

しかし文体の比較による類推・断定はよほどの確実なものがないかぎり難しい。文体の比較からは、やはり肯定否定いずれとも決しがないというのが妥当なところであろう。

さて、これまで宗長否定説のうち有力とされている地理的根拠と文体比較の二点について検討してきたが、結局否定の決め手にはならないということが論証されたと思う。しかし否定に決め手がないからといって宗長説への疑問が全く消えたわけではない。前にも述べたように宗長説はあくまでも状況証拠によるものであり、そうした論拠については▽『閑吟集』は連歌的編纂方法によるものという主として内容語句の連関にすぎず、一流の連歌師たる宗長を擬するまでもない▽『都鄙遠境の花のもと、月の前の宴席にたちまじはり』老若の人々と同座し得た人物は、連歌師の外に、応仁の大乱後地方に下った貴族や僧侶がある（以上浅野説要約）——等々、様々な反論はし得る。また吾郷氏の指摘されたように、宗長の自記の中に『閑吟集』に関する記事が全くないということも、依然疑問として残されている。多くの著作を残した

宗長が『閑吟集』についての仮名前を隠し、何も記していないということとは、やはり合理的な説明がなし得ない限り宗長説への大きな障害となるものであろう。

結局、このように考えてみると、『閑吟集』の編者については、宗長である可能性は否定し切れないのであるが、そうかといって積極的に宗長を押し出すこともためらわれるという状況にあるのである。

いずれにしても、これまでのあいまいな諸説を越える、確実な事実としての資料が出現しない限り、決着はつかないわけであるが、そうした新資料の出現が、おそらくは今後簡単に望み得ない以上、私としては、宗長説やこれまで紹介・検討した諸説にこだわることなく、もっと別な場所で編者を考えてみたい。

五 新たな編者像想定を試み

私の描く編者像であるが、『閑吟集』は小歌の『流行期』における一つの集成であるというのが私の考えである。狭義の小歌をはじめ大和節・近江節・田楽節・吟詩句・早歌・放下歌等、内容において多岐にわたる小歌を集取し、それを一書にまとめ上げることということは、単なる素人の気まぐれでは到底達成できることではない。背後には広範な流行現象があり、編者自身もそうした中にあって、小歌についてかなりの経験と習練を積んだものと考えなければならぬ。序文によれば「狂客」（真名序）、「ひとりの桑門」（仮名序）と形容されるだけで、その「本業」については確実なことはいかがい得ないわけであるが、小歌についてはセミブ

口的人物といふことができるであらう。

『閑吟集』の編者として、そうした人物を想定することはそれほど突飛なことではない。事実『閑吟集』に続く小歌集である『宗安小歌集』(室町時代小歌集⁽¹⁹⁾)には、序文に、

こゝに桑門のとはそをとちてひとり酒をたのしみ、こうたをうたひつゝたかきにもまはりやしきにもむつひ、老たるをも友ないわかきにもなつかし(う⁽²⁰⁾脱)せられたる沙弥宗安といふあり、ふるきあたらしきこうたにふし／＼をつけて、河竹のよゝのもてあそひとそなし侍る。

とあり、編者宗安が小歌の「専門家」的生活を送っていた人物であることがわかる。もちろん専門家とはいっても、あくまで余技としての域を越えないものであるうが、『閑吟集』についても仮名序の叙述から見る限り符合する点が多く、同様な人物を考えることは十分可能性のあることと思われる。

試みに『宗長手記』⁽²¹⁾をながめて見ると、小歌の伴奏楽器と目される尺八については、紹崇という僧をはじめ三井寺勝蔵坊、三井寺東円坊など、その名手として名のあつた人々を幾人も拾うことができる。特に紹崇は、

もとは東山靈山時衆。五条東洞院常福寺、紫野大仙院四・五年もありて、此ころは和泉の堺草庵。尺八の弟子、だんなにて活計。

〔宗長手記〕大永二年の条)

という人物であり、明らかに尺八の専門家である。小歌についても、この紹崇のように、桑門にあって活計のたしにしていた人物を想像することも可能である。又、勝蔵坊、東円坊は共に連歌の

たしなみのあつた人物である。宗長も尺八を好んで吹いたのであるが、私はこうした環境の中にある人物の一人で、仮名序に述べるような経歴に符合する者を『閑吟集』の編者と考えたい。

さらに、『宗長手記』等によれば、三条西実隆―宗長―豊原秋と結ぶ線の中に、一つの文化圏の形成されていたことがうかがえるが、豊原秋はその著書『体源抄』の中で強調しているように、尺八については「家元」的存在であつた。⁽²²⁾従つて一仮説として『閑吟集』の編者についても、さらに限定して、この文化圏に何らかの形で関わりのあつた人物と見ることも可能かもしれない。

注(1) 吾郷寅之進『中世歌謡の研究』一八九頁。

(2) 同前 一八七頁。

(3) 日原はるみ「閑吟集における世界観の道程」(東京女子大『日本文学』第36号)

(4) 最後の「豈小補哉」は、『閑吟集研究大成』は「編者の謙辞」とし、「なんと小補と言ふべきであらうか」と、詠嘆の意に解しているが、これはむしろ意味を強める反語であり、『閑吟集』が決して政教にとつて「小補」(すこしばかりのたすけ)ではないことを宣言しているものである。

(豈日三小補之哉〔孟子尽心上〕)

(5) この「命」の文字については、従来の刊本ではすべて「いのち」と訓み解釈をほどこしているが、これは「めい」と訂すべきものである。諸氏が不自然な「いのち」という訓みに固執されるのは宮内庁書陵部蔵本と阿波国文庫旧蔵本(志田延義氏現蔵)に「いのち」という振仮名が付けら

れているからであるが、この振仮名は必ずしも信用すべきものではない。というのは諸写本における振仮名は原著者の付けたものではなく、後の書写者が付けたものと見うけられるふしがあるからである。たとえば187番歌において「菊」の字の草体を、字体は明らかに「菊」であるのに、書陵部本と阿波国本は「草」の字と読み誤り「くさ」と振仮名している。原著者の振仮名であるならこのような間違いはありえない。また諸本の間には振仮名の有無に大きな差があり、振仮名自体の相違も見られる(47・56・153・150番)。現にここで問題になっている「いのち」の振仮名も水戸彰考館蔵本にはない。さらに諸本には一つの漢字に二つの読みが付けられている例があり、これも振仮名の信頼度を薄くするものである。以上のことを総合すると、やはり「命」については「いのち」という振仮名にこだわる必要はなく「めい」が正しい訓みと判断される。

(6) 松田修・書評『閑吟集研究大成』(『文学』昭45・4)

(7) 『五山文学新集』所収。なお「光厳老人」については生年等不詳。

(8) (1)と同著。三〇九頁。なお吾郷氏の編者についての「禅林に属する者」ということばは必ずしも明確ではないが、五山・禅林に関係を有する人物ということで用いているらしい。同氏は編者については、前項でも触れたように同書の別の箇所(一八九頁)で「隠棲した公家」との考えを示し、五山僧とは述べておられない。

(9) 小笠原恭子「ただ狂へ一期は夢よ」(角川版『日本文学の歴史』第六巻、四二七頁、四二八頁)

(10) (1)と同著。三九四頁。

(11) 『再昌草』の引用本文は桂宮本叢書所収本による。

(12) (1)と同著。三八四頁。

(13) 謡曲「輪蔵」の引用本文は岩波古典大系本『謡曲集下』による。

(14) 浅野建二『閑吟集研究大成』三一二頁。

(15) 安良岡康作・至文堂版『日本文学史』中世「漢詩文」の項。二九九―三二五頁。

(16) 両氏の説とも発表以来補訂がなされているので、共に最新と思われるもの、すなわち浅野説は『閑吟集研究大成』七九二―八〇四頁、吾郷説は『中世歌謡の研究』一四八―一八九頁による。

(17) 『宣胤卿記』及び「同紙背文書」の引用本文は『増補史料大成』による。

(18) 『雨夜記』の引用本文は統群書類従による。

(19) 『宗安小歌集』の成立時期については天正七年以降―天正十五年以前とする説と、慶長四年以降とする説の二説がある。なお引用の本文は笹野堅編の万葉閣版による。

(20) 『宗長手記』の引用本文は岩波文庫『宗長日記』(島津忠夫校注)による。

(21) 『体源抄』五・尺八の条には「当時田楽我道之様に申成事、一向無子細也、増阿と申者は、量秋の弟子に成て吹之侍、量秋早世之後、弟子の敦秋に近付て、其後東山靈山鷲尾寺にて、図を直し侍、雖然調子の事者、敦秋悉く指南し畢」と述べ、尺八と豊原家の関係を強調している。